



VOL. 4
Autumn 2015
季刊すんぷ



久能山東照宮四百年の真実〈総括編〉
家康公の基所

アドマック出版

東照大権現像(久能山東照宮博物館蔵)

静岡商工会議所「余ハ此處ニ居ル」プロジェクト

Design: アドマック出版

余ハ此處ニ居ル



久能山東照宮

聖地、久能山へ。

元和二年四月十七日、
徳川家康公は駿府城にて薨去され
久能山にて東照大権現という神様になりました
以来四百年、今もなお大いなる御霊験をもって
私たちの平和を守ってくれています

四百年の聖地久能山へ、日本一の名勝日本平とわずか5分で結びます。

日本平ロープウェイ《日本平山頂に無料駐車場あり》
お問合せは…電話 054-334-2026 (静岡鉄道株式会社 日本平ロープウェイ営業所)





2015年4月17日
午前10時17分

徳川宗家らが久能山東照宮社殿に向かう



毎年四月十七日の家康公の命日に斎行される久能山東照宮例祭に司祭として参列され、祭典のあと、久能山東照宮神廟（神君徳川家康公の墓）に参拝されているという事実だ。一方の日光東照宮には、その日何ら行事がない。その事実、久能山東照宮の例祭に参列すれば誰でも知り得ることだったが、それを口にする人は稀だった。それを初めて全国に知らせたのは、本年の御鎮座四百年大祭を取材した、NHKをはじめとする報道各社だった。二〇一五年四月十七日、「久能山東照宮御鎮座四百年大祭」の第三日の儀「例祭」には、徳川宗家より当主の徳川恒孝さん（写真先頭）とご子息の徳川家広さん（写真三番目）、そして尾張徳川家の第二十二代当主である徳川義崇さん（写真二番目）、水戸徳川家の第十五代当主である徳川斉正さん（写真最後尾）も黒の衣冠装束で参列され、久能山東照宮からは落合偉洲宮司ほか五名の神職が、本殿での祭典に奉仕した。祭典の後、一行は神廟を参拝した。この模様を、NHKが当日のテレビ全国放送で大きく報道し、新聞各社からも報道されたのだ。



2015年4月17日
午前9時16分

徳川宗家ら一行の参拝を待つ久能山東照宮神廟（徳川家康公の墓）

家康公の墓所

久能山東照宮四百年の真実（総括編）

語られなかった事実

二〇一四年十一月創刊以来、久能山東照宮落合偉洲宮司と浮月楼久保田隆社長による〈特別対談〉を幕開けとして、本誌がこれまでにお伝えし、検証してきたこと——それは、徳川家康公は駿府城で薨去されたその日のうちに、ここ久能山の山頂近くに埋葬され、それは一度も掘り返されてはおらず、四百年間ずっと、ここに眠っておられるということだった。

『日光へ「神柩」が運ばれて「改葬」された。だから久能山には何も無い』多くの人がそう信じてきた。しかしそう信じるには、あまりに矛盾が多かった。

そもそも家康公の遺命には、「久能山に葬れ」とあり、「一周忌を過ぎて後日光に小さき堂を建て勸請せよ」とまり、「日光に分祀せよ」とあるのだが、実は、遺された遺命を改めて読み返すまでもなく、久能山と日光と、どちらが本当の墓なのかを知るための、厳然たる事実がある。

それは、徳川宗家第十八代当主である徳川恒孝さんが、「神忌」と呼ばれる



2015年4月17日
午前11時20分

徳川宗家らが社殿での祭典の後、久能山東照宮神廟（徳川家康公の墓）に向かう

当日の報道

「一行は社殿の奥にある神廟と呼ばれる家康の墓を参拝しました。」（NHK）

西日本新聞ほか

「大祭には家康の子孫十数人のほか、ゆかりのある約300人が参加。水戸徳川家、尾張徳川家の当主も顔をそろえた。神事の後、一行は本殿奥にある家康の墓を参拝。」（北海道新聞および西日本新聞各電子版2015年4月17日の記事より抜粋）

読売新聞

「この日は徳川宗家第18代当主の徳川恒孝さん、尾張や水戸の両徳川家当主らも、黒の衣冠に身を包んで参列。徳川家の人々は、木遣り唄に先導され、神職らとともに社殿に入った。参拝客らは社殿の周りから、真剣な表情で神事を見守っていた。」

神事が終わると、徳川家の人々は落合偉洲宮司とともに、家康の墓を参拝した。」（読売オンライン2015年4月17日の記事より抜粋）

NHK

「神事では、徳川宗家18代当主の徳川恒孝さんが司祭を務め、古式にのっとった装束を身にまとった神職などおよそ350人が53段ある石段を上り、社殿に向かいました。そして、東照宮の落合偉洲宮司が家康の遺徳をしのんで祝詞を読み上げたあと、雅楽の演奏に合わせて春を告げる舞が奉納されました。このあと、一行は社殿の奥にある神廟と呼ばれる家康の墓を参拝しました。」（NHKニュースウェブ2015年4月17日の記事より抜粋）

以上は、著作権法第32条に則り引用させていただいたものです。



2015年4月17日
午前11時22分

徳川宗家らが久能山
東照宮神廟を参拝

ないだろうか。
何に対する気遣いだったのかといえば、それは、東照大権現を崇めてきた全ての日本人の、純粹なる信心に対する気遣いだろう。
遺骸がどこにあるかと、家康公は神として偏在する。正式に「東照宮」と名のつく大きな神社だけでも、北の北海道東照宮（函館東照宮）から西の広島東照宮まで、全国に少なくとも二十三を数える。
日々参拝者が絶えることなく、例祭、例大祭には盛大なお祭りが行われ、各東照宮は、それぞれの地域の誇りにもなっている。
「家康公の遺骸をどこだと特定したところで、そうした信心には一向役立たない。何より日光は、かくも荘厳で壮大ではないか」
そんな気遣いの心が、事実を知る人々に働いていたのではないだろうか。

「日光へ神柩が運ばれて改葬された。だから久能山には何も無い」
それはあくまでも俗説だった。
事実がどうだったかといえば家康公の遺命どおりで、久能山が本当の墓であることに、もはや疑いの余地はないだろう。
そもそも、家康公命日における久能山神廟への墓参は、本年斎行された四百年大祭に限ったことではなく、毎年続けられてきたことだった。徳川宗家が毎年の命日に欠かさず墓参するのは、日光ではなく、久能山であり続けたのだ。
だがそれは語られなかった。この事実についてだけは、あえて口にするのが憚られてきた。それは、事実を知る人々の、精いっぱい気遣いだったのでは

俗説と気遣いと

年表で追う遺命

家康公の遺命を年表で追ってみた。遺命は、しっかり生き続けていた。

元和二年 (1616年)

4月2日 徳川家康公が駿府城にて、本多正純、天海、崇伝の三名を呼び遺命を託す。

「臨終となつたら体は久能山に埋葬し、葬儀は江戸の増上寺にて、位牌は三河の大樹寺に、一周忌も過ぎて後、日光山に小さき堂を建て勸請(II分祀)せよ、関東八州の鎮守になるべく」(本光国師日記)

4月16日 病状が悪化する中、側近の榊原照久を枕元に呼び、自分の体を久能山の神廟に西向きに埋葬すること、久能山の祭主となることなどを命じる。

4月17日 巳の刻(午前十時ごろ)、徳川家康公が駿府城にて、榊原照久の膝を枕に臨終。夜、久能山に埋葬される。

元和三年 (1617年)

2月21日 東照大権現の神号をたまわる。

3月15日 日光へ「柩」を運ぶ「宮遷し」の行列が久能山を出発。指揮を執った天海が久能山に和歌を残す。
「あればある、なければなきに、駿河なる軀のなき神の、宮うつしかな」(久能山叢書第四編)

4月17日 日光への「宮遷し」が完了する。

全日程のうち、実際に移動したのは十日のみと、非常にゆつくりと「棺」を運んだ後、四月八日に日光奥院に棺が安置された。

12月 久能山社殿が完成する。「東照社」と称する。

寛永十一年 (1634年)

6月26日 將軍家光が久能山に参詣。還暦を迎えた榊原照久を迎える。京都へと向かう家光は「家康公は久能山にあり」という意味の和歌を久能山に残す。

「東より、照らす光の、ここにありと、今日もうでする久能のみやしる」(久能山叢書第四編)

家光が日光を建てなおす。(寛永の大造替)

寛永十三年 (1636年)

家光奉納の五重塔が完成。

寛永十七年 (1640年)

久能山廟所に巨石を使った石の宝塔が完成。

正保二年 (1645年)

11月3日 宮号が下り、「東照社」から「東照宮」となる。

延宝六年? (1678年?)

久能山東照宮に覚書あり。「御神体之事。当山之秘事也。」「遺命葬于久能山」(久能山叢書第三編)

【参考文献】『本光国師日記』続群書類完成会刊／『續國史大系第9巻・第10巻』經濟雑誌社刊／『久能山叢書』久能山東照宮刊／『久能山東照宮年表』久能山東照宮ホームページ

家康公遺命 (元和二年四月十六日)

「体は久能山に埋葬せよ」
「日光山には分祀せよ」



天海大僧正は、分祀を「宮遷し」と称し、家康公の分霊を収めた「棺」を久能山から日光山へ運ぶ指揮を執った。久能山にはその時、「棺の中身はあってもなくてもよい」という意味の歌が残された。

駿府城翼櫓と東御門 (静岡市葵区駿府城公園)

家康公遺命 (元和二年四月十六日)

久能山埋葬の極めて重要な目的

「西国鎮護のため」
体は西に向けて埋葬し
清久は祭主となれ

*後に照久と改名



家康公の最期を駿府城で看取った榊原照久は、後に久能山の麓に寺を建立し、その墓から、今も家康公が眠る久能山を見守っている。

宝台院別院 (旧照久寺) 榊原照久の墓 (静岡市駿河区安居)

五重塔と素足の参拝

写真で見る幕末ごろの久能山東照宮

この写真は、二つの点で極めて貴重なものだ。

まずひとつめは、すでに現存しない五重塔が写っていること。寛永十三年（一六三六年）、三代将軍徳川家光公によって奉納された五重塔であったが、神仏分離令と、廃仏毀釈運動によって、神社である久能山東照宮に仏教的な五重塔を残すことが難しくなっていました。

廃仏毀釈運動は、国内の多くの寺を破壊するところまでエスカレートし、鹿児島県にいたっては全ての寺が破壊されてしまったともいう。現代でも、過激な思想に支配された人々による歴史的建造物の破壊行為には世界中から非難の目が向けられるが、日本にもそうした悲しい歴史があったのだ。

この五重塔の破壊については、小鹿村（静岡市駿河区小鹿）の農家出身で後に久能山東照宮の祠官になった神道家の出島竹斎ら、何とかそれを食い止めようと尽力した人たちがいたのだが、明治六年（一八七三年）八月、ついに跡形もなく解体され、写真に見るような偉容は失われてしまった。

そしてもうひとつ、この写真が貴重なのは、士族風の二人の参拝者が写っていることだ。特に右の人物は、参道の右端縁石に素足で立っている。かつては境内が土足禁止だったといわれているが、その様子がこのように記録されているのだから、その点でもこの写真は極めて貴重なものだとはいえるだろう。



右側人物足元の拡大写真



徳川慶喜公屋敷跡



SUMPU

VOL. 4
Autumn 2015
季刊すんぷ

久能山東照宮四百年の真実〈総括編〉家康公の墓所

ネットでも読める! ▶ <http://sumpu.net> 駿府ネット 🔍

久能山東照宮四百年の真実〈総括編〉家康公の墓所	語られなかった事実	04
	当日の報道	06
	俗説と気遣いと	08
	年表で追う遺命	10
五重塔と素足の参拝 〜写真で見る幕末ごろの久能山東照宮〜		12

© Copyright 2015 Admac Inc. Shizuoka Japan All Rights Reserved. Printed in Japan

編集部よりお知らせ

昨年11月発行の創刊号から、本号までの主要記事を編集した『余ハ此處ニ居ル(ヨハコニナル)〜すんぷ特別版〜』(右書影)が発売されます。(税抜定価300円)
雑誌ではないので書籍コード(ISBN9784990726119)も取ったんですが、本号編集時点では、どこで販売されるかがまだ決まっておられません。決まり次第、上記「ネットでも読める!」の「駿府ネット」でお知らせしますので、手に入れた方は時々チェックしてみてください。
また、次号二〇一五年冬号は、11月19日大安吉日の発行を予定しています。

季刊すんぷ 第4号 2015年8月18日 第1版発行

発行者 興津 諦 (おきつ あきら)

発行所 アドマック出版 (アドマック株式会社出版事業部)

〒422-8046 静岡市駿河区中島 1185-1

☎ 054-340-6100 ✉ pub@admac.jp

🌐 <http://sumpu.net> (季刊すんぷ「駿府ネット」)

<http://admac.jp> (アドマック出版)

